

資料涉猟余話

その56

敬愛する行路矢高東 として診ていただいた先生(残念ながら実は こともないので、本当師事したことも、患者 は「先生」でもなんて



帙入り和紙袋綴の豪華本『紫明帖』

もないのだが、…便宜のようになってしまった」的にこう呼ばせていたと、嘆かせたのは萬象(なく)は、確か大正の鹽澤直市の突然の死で終わり頃、郷里に戻った。あつた。

たのだったと記憶する 萬象については、『飯が、開業医 華かなり 田市医師会のあゆみ』し頃「五」(伊那)3に少し書いたが、明治87号所収)を読む 3年7月下條村に生ま

行路先生の嘆き 鹽澤萬象

『紫明帖』

嶋 不 濁

と、明治末から大正・昭和初期にかけて見聞きした開業医の生態を裏に生き生きと描いている。その行路先生をして「萬象なき後の飯田はめっきりつまらないも

郡医師会長・県医師会副議長・大日本医師会議員などを歴任している。医者の教科書『七科約説』の訳者で、日本近代医学を牽引してきた虎岩武が明治27年8月38歳で急逝した後、瀧澤清頭らと並んで飯田下伊那医学会の次期リーダーであった。一方で、萬象と号し、主税町時代は俳句(松聲会、半夜会、後に半聲会)、伝馬町に移ってから絵画(画楽多会、伊奈杏林画会)を能くした。痴山北原阿智之助・瀧舟矢高瀧重郎・啞堂松井鑛一・枯風西澤庸太郎・七峰西尾東造・石水北條教継

・磧鼠吉川繁治・迦公 南信州地域資料センターには『紫明帖』と『萬象遺稿』が寄贈されている。『紫明帖』は急逝の前年に平洲上柳緑(喜茂)・杉山為次郎・市瀬文三郎・原勇馬・加納清作らが催主となつて萬象の南画の頒布会をし、その折の絹本20点を和綴作品集(発光堂)にしたもので、

萬象先生を囲む集合写真がある。題箋は痴山人北原阿智之助。



前列中央の洋装が萬象、その左隣が瀧澤清頭、飯田のお歴々が揃っている